

# ハイデイ

(第二十四回)

津田芳雄譯

二十二、思ひがけないこゝ

あくる朝、おぢいさんは早くから起き出して、お天気工合を見た。峯の上には赫々金いろの光りが射し、そよ風がしづかに樅の枝をなぶつてゐた——お日様がのぼりはじめたのである。

おぢいさんはなほも立ちつづけ、みぎりの山の斜面がだん／＼と明らんで来て、夜の影が谷間から消えて行き、くぼみにも朝の光りが射しはじめ、やがて峯も谷も、いちめん朝の金いろの光りに洪水のやうに埋もれつくすのを、ぢつと見詰めつめてゐた——お日様が、のぼり切つたのである。

おぢいさんは今日の山遊びの用意に、クララの寝椅子を小屋から曳き出しておいてから、子供

達によいお天気だぞ知らせに、中へ這入つて行つた。

丁度この時、ペーテルが登つて来た。山羊たちはいつものやうに安心してペーテルの傍へ寄り付かうまはせず、おつ／＼と逃げまはつてゐるやうだつた。ペーテルの機嫌がわるくて、むやみに鞭をふりまはし、そこいらでうろ／＼してゐれば、すぐ打たれるからだつた。もう幾週間もペーテルは、せんのやうにハイデイと二人きりで遊べなかつた。朝のぼつて来れば、もうちやん病氣の子供が寝椅子にねてゐて、ハイデイはその子にばかり氣をまられてゐる。夕方降りて来ても、やつぱり同じ有様だ。ハイデイはこの夏ぢう、一ぺんも

山へ行つたこゝがない。やつと今日行くのだつて、やつぱりあの寝椅子の病人と一緒になのだから、さうせいちゃんち、そつちにつきつきりなのだらう。今朝ペーテルが特別機嫌がわるいのは、そのためだつた。目の前に、高い車のついた豪華な寝椅子が、傲然と据つてゐた。その高慢ちきな様子が癪にさはり、ペーテルは、まるでそれが、今まで自分をいぢめこぼし、又も今日いぢめつけようとしてゐる敵でもあるやうに、睨み据ゑてやつた。あたりを見まはすに、何の物音もなく、誰一人見てゐない。ペーテルは野獸のやうにそれに飛びかかるに、腹立ちまぎれに、谷をめぐりて激しく突き落した。寝椅子はくるくると轉がり落ちて、またたく間に見えなくなつてしまつた。

ペーテルは、急に羽でも生えたやうに一氣に山を駆けのぼり、おぢいさんに見付けられないやうに、大きな黒いちごのしげみに隠れた。しかもあの寝椅子がさうなつたか、見たくてたまらないのだつたが、それにはこゝはうつつけの場所だつた。自分は隠れてゐて、下の様子が手に取るやうに見えるのだつたから。頭をもたげて見るに、敵の寝椅子は、ごろ／＼大へんな勢で坂を轉がり

落ち、幾度かひつくりかへりながら、最後に大きく跳ね返つて、粉みぢんに碎けてしまつた。脚も、腕木も、背中のよつかかりも、それを包むおふさんの切れつばしも——方々へ散り散りに飛んで行つてしまつた。それを見るにペーテルは、胸がすう／＼して、うれしくてたまらず、大きな聲で笑ひながら、飛んだり跳ねたり、しげみを飛び越してぐるつと一回まはつて来て、又思ひ出してげらげら笑ひ轉げたりした。敵をやつつけた満足さで、夢中になつてゐるのだつた。もちろん、自分に都合のよいこゝしか考へて見ず、もうかうなつてはあの病人も、さうしても家へ歸るより仕方がなくなるから、さうすれば又ハイディはせんのかうに自分と一緒に遊べるやうになつて、なにもかもが元ざほりきちんち行くだらうと思つたのである。ペーテルには、わるいこゝをすれば、あきできつと面倒が起るこゝなき、考へても見なければ、知りもしなかつたのである。

ハイディは小屋から駆け出して来て、物置きの方へ行つた。おぢいさんはクララを抱いてついて来た。物置きは二枚の戸をはづして、隅々まで明るく、ハイディは中をよくしらべて見たが、こゝにも

寢椅子がないので、不思議さうに考へ込んでゐた。

「これはさうしたこまぢや、ハイディ。お前がここへ寢椅子を押しして行つたのかね」

「わたしも方々さがしてゐるさうなのよ、おぢいさん。ちやんこ出してあるつて仰しやつたわね」

それから、又も隅々まで探しまはつた。

その時、急に風が吹き起つて、物置ききの戸をあふつて、ばたん／＼と壁に打ちつけた。

「ああ、わかつた、風だわ、おぢいさん」

ハイディは急に思ひ付いて、それから突然心配さうに云つた。

「でも、もしか風が、デルフリの方まで吹き飛ばしたのだつたら、なか／＼取つて來られないわね。今日の間に合はなくて、お山へ行けないかも知れないわ」

「下まで吹き飛ばされて居つたら、もう駄目ぢや。粉つ葉みぢぢやからな——それにしても、さうもをかしい」

おぢいさんは、椅子がおいてあつた所から坂までは、角を一つ曲らねばならないのに、そこまで椅子がひそりで歩いて行く筈はないし、さうも不審でならないのだつた。

「まあ、つまらないわ」

クララは悲しがつた。

「今日は行かれないのねえ。いつになつたつて、もう行かれないかも知れないんだわ。椅子がなくなれば、あたしはおうちへ歸らなきやならなくなるのかしら。まあつまらない、つまらないわ!」

けれどもハイディは、いつもの信じ切つた眼で、おぢいさんを見上げた。

「おぢいさん、クララが云つたみたいなの、あんなことにならないやうにして頂戴。クララがおうちへ歸らなくつてもいいやうに。ねえ、おぢいさん」

「よしよし、今はまづ、豫定さほり山へのぼることにしよう。あまのこまは又、あまで考へるさ」

子供達は大方こびだつた。

おぢいさんは中に這入り、一と抱えの肩掛けを持つて來て、一等よく日の當るさうこへ擴げ、クララを坐らせた。それから子供達の朝のお乳を持つて來て、二匹の山羊を出してやつた。

「ペーテルはさうしたのぢやらう」

今朝はまだ一度も口笛が聞えないので、ちよつと不審に思ひながら、片手にクララを抱き、片手に肩掛けを抱えて、云つた。

今朝はまだ一度も口笛が聞えないので、ちよつと不審に思ひながら、片手にクララを抱き、片手に肩掛けを抱えて、云つた。

「さあ、出掛けようかな。山羊共は、ほつておいてもついて来る」

ハイディは大よろこびで、二匹の山羊の肩に手をかけてやりながら、おぢいさんのあこからついて行つた。山羊たちはハイディと又一緒に山へ行けるうれしさに、あんまりぎう／＼身をすり寄せ来て、もう少しでハイディを両方から押しつぶしてしまふところだつた。

山羊たちがいつも草をたべるところまで行つて見るさ、ほかの山羊たちはもう來てるて、岩の間を走りまはつて居り、ペーテルは長々寝そべつてゐるので、みんなはびつくりした。

「こりや、怠け者。そんなことをしてゐるさ、あこでひきい目に逢ふぞ。一體これは何事ぢや」

おぢいさんが聲をかけるさ、ペーテルは鐵砲玉のやうに飛び起きて、

「誰もまだ登つて來やしないよ」

さ、さんちんかんな返事をした。

「何か椅子のやうなものは見かけなかつたかね」

おぢいさんが訊ねるさ、

「みんな椅子のこゝさだわ」

ペーテルは、つんけんさんに答へた。

おぢいさんはその上もう何も云はずに、日當りのよい斜面に肩掛けをひろげ、クララを坐らせて、坐り心地はよいかさたづねた。

「あたしの椅子にかけてるのさ、おんなじだわ」クララはおぢいさんにお禮を云ひ、うれしさうにあたりを眺めながら叫んだ。

「ほんにきれいなさころねえ、ハイディちゃん、氣持がいいわねえ！」

おぢいさんは一さまづ歸るこゝにした。二人でゐれば面白しいし、心配なこゝはないし、おひるになれば、くぼみの所にお辨當が置いてあるから、ハイディが取つて來て、ペーテルに幾杯でもお乳をしぼつてもらつて飲めばよく、ただくれぐれも「小さい白鳥」のお乳をしぼつてもらふやうに氣を付けるこゝ、自分はこれから、椅子がさうなつたかを見届けに行つて來て、夕方迎ひに來てやるさ云つた。

空は紺青に晴れわたり、一點の雲もなかつた。

頭の上の大雪原は、幾千の金銀の星が縷められたやうに、キラ／＼と光つてゐた、峯の頂きが二つ、青空にくつきりさ聳え立ち、太古さながらの嚴かさで、ちつさ谷を見下ろしてゐた。大きな鳥は晴

れた大空に高々ミ羽をのばし、山風は峯をわたつて、日向の斜面にやすむ子供達のミころまで、そよ／＼吹いて来た。なにもかも、クララミハイディには、口に云へないくらゐ楽しかつた。時々小山羊たちがあそびに来ては、二人のそばに寝ころんだ。「ゆき」が一等よくやつて来て、小さな頭をハイディにすり寄せて来るのだつたが、あまり長く二人のそばをひさり占めにしてゐるミ、ほかの山羊たちが、きいてくれミ追ひ立てに来るのだつた。クララはすつかり山羊たちを見覚えてしまひ、一匹一匹顔立ちもくせも思ひ思ひに違つてゐるので、もう決して間違へるやうなミはなかつた。山羊たちもクララになつき、お近づきミ大好きものしるしに、クララの肩に頭をすり寄せて来るのだつた。

かうして楽しく何時間が経つうちに、ハイディは急に澤山のお花が咲きみだれてゐるミころへ、行つて見たくなつた。今でも去年ミおんなじに咲いてゐるかしたら、クララはおぢいさんが、夕方迎ひに来てくれるまでは行けないけれど、それまで待つてゐては、しぼんでしまふかも知れない——なミミ考へはじめるミ、もうぢつミがまんがして

ゐられなくなつて来た。

「ねえ、クララちゃん、もしかわたしが、ちよつミだけ向ふへ行つて来て、あんた怒らないミ？」

ハイディは少しもぢ／＼しながら、云ひにくさうに云つた。

「——ね、ぢきに歸つて来るわ。お花がさうしてゐるか、ちよつミ見て来たいの——あ、ちよつミ待つて」

いいこミを思ひ付いた。走つて行つて一束の青い葉つばを摘んで来るミ、「ゆき」をクララのそばへつれて来た。

「さあ、これでひさりぼつちぢやないわ」

ハイディは「ゆき」にそこへ寝ころべミ合圖をし、クララの膝に葉つばをのせてやつた。クララが、山羊ミお留存をしてゐるのは面白いから、早くお花を見ていらつしやいミ云ふミ、ハイディは駈け出して行つた。